
Dear...

みかん飴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear...

【コード】

N02570

【作者名】

みかん飴

【あらすじ】

主人公が死んだところから話が始まります。

プロローグ

寒い…

暗い…

人の“死”というものは、こんなにもあっけなく訪れるものなのだろうか…。

俺は、大地震によって倒壊した家の瓦礫の下に埋もれたまま、誰にも気づかれること無く…生涯を閉じた。

そう…人の死とはあっけない。

“それ”は突然やってくる。

そして、“それ”は避けることのできない運命だ。

しかし、死とは生であり、生とは死である。

人は生まれた瞬間を以って死ぬ運命にあり、死んだ瞬間に生まれる…。

俺の人生は終わりを告げたと同時に、また歯車を動かし始めた。

死…そして生

俺は、死んだ。

…はずだった。

「あれ？俺生きてる…。」

確かに死んだはずなのに、普通に目を覚ますような感じで起き、生きている時となんら変わらない感触に、ふと疑問を抱き、そう一人で呟いた。

それにしてもここは何処だろう…。

見覚えが無い。

「病院…じゃなさそうだな。」

「あつ、起きたんだ？」

ドアの方から声がしたので、見てみるとそこには一人の少女が立つ

ていた。

「えっ？誰？…ってか、ここ何処？」

状況がつかめず、俺は少女に尋ねてみた。

「ここは黄泉の国よ。それより命の恩人に向かって『誰？』はないんじゃないの？あんたこそ誰よ？」

少女は不機嫌そうな顔をして切り返してきた。

「あ、俺か？俺は『新田 悠次』って名前だよ。つーか、今『黄泉の国』って言った？」

「ええ…ここは『黄泉の国』よ。死んだ者がまず最初に行き着く霊界の国よ。」

やっぱり、俺…死んだのか…。

「何、暗い顔してんのよ。死んだら死んだでもうどうにもならないんだから、仕方ないじゃないの。」

そう少女は俺に言った。

まあ…それもそうだな。

死んでしまった以上、もう元には戻れない。

俺は顔を上げて彼女に対し微笑むと、少女は言った。

「あたしの名前は『ミーシャ』よ。よろしくね。」

「おう、よろしくな。ミーシャ。」

平和な日常

…俺が死んで、こつちの世界に来てから黄泉では5回の朝と夜が繰り返された頃だった。

俺は、ミーシャと一緒に街へと服や家具を買いに行くために出かけた。

「それにしても、まさかミーシャが住んでるあの家が修道院だったなんてな…。」

「ん？なに？何か言った？」

俺がつぶやくとミーシャは不思議そうに聞いた。

「いや…なんでもないよ…。」

俺は、あれからその修道院に居候させてもらっている。

修道院には他にも色んな住民がいた。

…あまり、いい印象は抱けなかったけどな。

「あ、もうすぐ街みたいね。」

俺が少し考え込んでみると、ミーシャはそう言った。

「え？めっちゃデカくない？」

「まあね、ここら辺じゃ一番の都市だし、現世の12000倍の人口がこの辺には住んでるし。」

想像もできねーよ。黄泉全体で何人住んでんだよ。

「すげーな。」

「常識よ。でもここ最近この『中宮』でも治安が悪くなってるみたいね。」

「そうなのか？そうは見えないけどなあ。」

「それは、ここが繁華街だからよ。スラム街じゃあ、強盗、殺人、誘拐なんでもありよ。まったく何をやってるのかしら賢人たちは。」

「ん、賢人ってなんだ？ミーシャ。」

そういうと少しあきれた顔でミーシャがこっちを向いた。

「はあ…まったく、何も知らないのねあんたは。」

「仕方ねえだろー！黄泉に来たばっかなんだから。」

「まあいいわ、黄泉には5つの都市があつて、それぞれを5人の賢人が治めてるの。その賢人たちが黄泉の国を会議で統括してるんだけど、その会議が行われるのがこの『中宮』。つまり賢人たちのお膝元よ。」

「あ、あれ買おうかな。」

「人の話を聞けやああああああああ！！！」

顔面に飛び蹴りを食らいました…。

あ、ピンクと白の縞々が見えた。

「いつてえなー！！何すんだよー。」

「自分から聞いといて、なんで話聞いてないのよ！！そりゃ飛び蹴りもするわよつ。」

そう言いながら頬を膨らませるミーシヤ。

…なんだかなあ。

なんやかんやで、俺たちは買い物が終わらせ、帰路についた。

「ん？火事かな？なんたるあの煙…。」

俺は、窓の外を見ながらそうつぶやいた。

まあ、治安が悪いんだったら火事なんか不思議でもないか…。

だんだん街が遠のき、しばらくすると家に着いた。

「おつかえりー ミーシャ、悠人」

玄関に上がると廊下の奥から声が聞こえ、それと同時に後頭部に激痛が走った。

「…っおおおおおっ」

「あれ〜どうしたの悠人お〜？」

少女は不思議そうに聞いてきた。

「てめえが飛び込んできたから、下駄箱にモロ頭ぶつけたんだよ。このバカ!!」

「むう」。バカとはひどいなあ。」

ちなみにミーシャは華麗にかわしたため、無傷である。

「悠人、マリア。なにしてんの？荷物運ぶの手伝って。」

「お、おう。わりいな、ミーシャ。」

そう答えると、俺は立ち上がり、荷物を運び始めた。

が、ミーシャと荷物を運び始めた矢先、部屋の入り口の方からなんか聞こえた。

「ほんまにラブラブな夫婦やなあ。見てるこっちが恥ずかしいわ。」

こ、この下品な関西弁野郎は…!!

「かつ…からかつのはやめてよねっ。だっただ…誰がこんな男なんかとっ…。」

顔を真っ赤にするミーシャ。

「そうだぞ、ジェイド。つか、なんで外人なのに関西弁なんだよお前は!!」

「それ言うたら、なんでみんな外人なのに日本語しゃべっとんかってなるやる?」

「…いや…。それは作者の都合って事で…。」

これは…ね。追求してもどうにもなんないよ。うん。

「早く運びなさいよ!!」

部屋の方でミーシャが叫んだ。

「ほらほら、嫁さんがお呼びやでえ。早よ行けやあ」

「うっせー。このエセ関西人!!」

そう言い捨てて俺は部屋に向かった。

事件

翌日の朝、俺が起きてリビングへ行くとそこにはすでにミーシャがいた。

「おはよう。ミーシャ。」

「ああ、悠次おはよう。」

そう軽く挨拶を交わすと、俺は椅子に腰掛け、ミーシャが朝食を作り終えるのを待ちながらテレビをつけた。

俺が料理を手伝わないのは、あまりに下手なため、ミーシャが手伝わせてくれないからである。

テレビを見ていると、朝のニュース番組が始まった。

「きょうの中宮の天気は一日中快晴です。洗濯日和、行楽日和のいい一日になるでしょう。」

お天気お姉さんがテンション高めでそう言ったので、窓のほうを見ると雲一つない快晴だった。

「いい天気だな。今日も暑くなりそうだ。」

俺はそう呟くと、料理が終わりミーシャが朝食をテーブルの上に並

べ始めた。

「そうね。これだけ晴れてると気分がいいわ。」

ミーシャも上機嫌にそう答えた。

朝食の匂いにつられてか、エリザベスとジェイドもリビングへと集まってきた。

一方、ニュース番組のほうは、天気予報が終わり、ニュースに切り替わっていた。

「昨日、中宮の副都心のビルで大きな爆発がありました。原因は未だ分かっておらず、治安当局は現在も調査を続けている状態です。」

「副都心…ってこれ昨日行った場所のすぐ近くじゃない!!」

ミーシャは驚きながらニュースに食いつくように見ていた。

『この爆発って昨日見たアレだよな…?』

俺は、昨日の爆発を思い出しながらそんなことを考えミーシャに質問を投げかけた。

「なあミーシャ、治安が悪いんだったら爆発なんてそこらじゅうで起こってるんじゃないか？」

「そんなわけ無いでしょ！副都心でビルが爆発なんて前代未聞よ。治安が悪いって言っても、スラム街で強盗とかそんなレベルだったけど、副都心でこんなことが起こるなんて…。」

ミーシャはかなり動揺しながらそう言った。

まあ、現世でもこんなことはめったにないし、それは黄泉も同じことなのだろう。

テレビのほうは何やら騒がしかったので、テレビに目を向けると、緊急ニュースが入っていた。

「緊急速報です。治安当局が中宮で起きた爆発による死亡者の身元を確認したところ、中宮の賢人が死亡していたことが判明しました。賢人の遺体は複数の深い傷を負っており、爆発に飲み込まれる前に何者かに襲われた可能性があると当局は見ており、爆発自体が不自然なものであり、犯人がビルを爆破した疑いもあるため、治安当局はこれを犯人によるテロ事件として捜査本部を設立し、東西南北の4人の賢人たちにより中宮に戒厳令が敷かれました。」

ニュースキャスターが明らかに青ざめた表情で、そう言った。

それもそうである。5人の賢人のうち1人が死に、実質上の中央政府の位置する中宮に戒厳令が敷かれたのだから。

食卓も唾然としながらテレビに見入っていた。

あのウザいエセ関西人のジエイドですら、テレビに見入っていた。

「…これからどうなっちゃうんでしょうね、黄泉は？」

すく、心配そうにミーシャは呟いた。

「……………」

エリザベスは無言のままである。

「なんやあ、朝から物騒なニュースやなあ。おかげでバツチリ目え醒めてもつたやんけ。」

ジエイドも何やら真剣な目つきでそう言った。

朝食を食べ終わるとみんなはそれぞれの部屋に戻り、各自の時間を

過ぎました。

空を見上げると何やら黒い雲が空をおおい始めていた。

夢

…夢を見ていた……。

それは、とてつもなく暗く悲しい夢だった。

「……ここは、どこだろう……？」

ふと気がつくと、そこは荒れ果てた街の中だった。

それもどこかで見たことがあるような景色だ。

「……みんなは……どこにいるんだ……？……ミーシャ？……ジエイド？……マリア？」

呼びかけてみたが返事はないようだ。

俺は、少し辺りを探してみた。

しかし、ミーシャ達どころか一人見つけることができなかった。

「みんなどこにいるんだよ…？ここは一体どこなんだよ…？」

俺がそうつぶやくと、どこかで物音がした。

「誰がいるのか…？」

物音がした方向に向かってみた。

「……………なんなんだよ…これは？」

そこにはたくさんの人が倒れ伏しており、なにやら大きな魔法陣（？）が強烈に光っていた。

「まだ、生きている者がおったのか…。」

いきなり声が聞こえたので、声の主を探してみると、魔法陣の上に人がいた。

「誰だよ！？これは一体何なんだよ！？」

俺は叫びながらその声の主に、聞いた。

「お前が知る必要はない。お前も今から……。」

その言葉と共に、強烈な光が炸裂した。

「悠次？悠次つてば！！」

ミーシャの声が聞こえたので、目を開けると……そこは俺の部屋だった。

「…あれ？俺の部屋…？俺、どうしてたんだろ？」

「すごい大きな呻き声上げてたわよ。一体どうしたの？」

ミーシャが心配そうな顔で俺を覗き込んできた。

「いや…夢を見てみたいだ。あんまりよくない夢だったような気がするけど。」

俺はそういつとベッドから起き上がり、顔を洗いに洗面所まで降りていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0257o/>

Dear...

2010年11月11日18時56分発行